

「ヒロシマ、ナガサキを風化させない」

大阪教育大学 池上英明

「私たちには使命があります。あの日、広島で起きた悲惨な出来事。そのことを知り、被爆者の方々の思いや願いを聞き、考え、平和の尊さや大切さを、世界中の人々や次の世代に伝えなければならないのです。」これは昨年の広島平和記念式典での子ども代表による『平和への誓い』の一節です。

このコラムが掲載される77回目の夏を私たちはどのような国際状況下で迎えているでしょう。

ウクライナへの軍事侵攻を行ったロシアの大統領が核兵器使用に触れたことで核を巡る危機は一挙に高まりました。最初この発言を聞いた時、私は思わず耳を疑いました。広島・長崎の悲劇を繰り返さないと訴えてきた被爆者をはじめとした多くの人々の血のにじむような努力を踏みにじるのかと。

被爆者の方々は、広島・長崎の惨状を繰り返してはならないという思いで、私たちに命をかけて、訴えてくれました。「ヒロシマをいつまでも風化させないで下さい。世界にあの恐ろしい人殺しの道具がなくなるまでヒロシマは歳はとらない、とらせたら困るんです」（「ヒロシマには歳はないんよ」佐伯敏子 ヒロシマ・ナガサキを考える会）

私は昨年度末まで小学校教員として、子どもたちや保護者と共にヒロシマを教材に平和学習に取り組み、修学旅行では多くの被爆者の方からお話を伺ってきました。一昨年度、昨年度は「コロナ禍」で実施が危ぶまれましたが、市による力強い支えと被爆者の方々をはじめとした多くの方々の協力のおかげで広島修学旅行を実施できました。そこには広島、長崎の悲劇を、そして、戦争を二度と繰り返してはならないという人々の強い願いを感じました。

戦争は最大の人権侵害です。多くの人々の命が蔑ろにされているウクライナとロシアの戦争はこのことを私たちにまざまざと見せつけました。新聞、テレビ、ネットニュースで日々伝えられるあまりにも酷い事実に私は希望を見失いそうになりました。

しかし被爆者の方の一人であるサーロー節子さん（90歳）は核兵器禁止条約の第1回締約国会議の関連イベントに参加し核兵器廃止の声を上げ続けておられます。サーロー節子さんのノーベル平和賞受賞スピーチをもとにした絵本「光にむかって」（くさばよしみ編 やまなかももこ絵 汐文社）にはこんな言葉があります。

「どうかみなさん、広島と長崎で亡くなったすべての人のことを、自分のことのように想像してください。いまとつぜん頭の上で核兵器が爆発したらと想像してください。あなたの、ほらすぐ横に原爆で亡くなった20数万人の魂の影を感じてください。あなたに名前があるように一人ひとりが誰かに愛されていました。何も言えずに死んでいった人たちのかわりにわたしたちが声をあげなければならないのです。」ヒロシマ、ナガサキを再び繰り返してなりません。